



◆こどものためのドラッグ

大全を読んで

中川根中2年 石間幸夫



ドラッグとは、「人間の意識に著しい変容をもたらす薬物」好奇心や快楽等の目的で使用される薬です。コーヒ、アルコール、タバコもドラッグですが、これは合法的なドラッグと言われ、あまりにも日常的で身近すぎて、僕たちでさえ「本当にこれもドラッグかなあ」という感じさえします。でも父が、一時健康のためと言ってタバコを吸わない時がありました。すごくイライラしたり怒ったりして母とけんかしたり、家の中の雰囲気が悪くしたことがあります。症状だったようです。これらのものは、世間の文化や慣習にとけ込んでいるから禁止し

ないだけで、この本を読んでいたなら、アルコールの売買が禁止されている国や昔コーヒー禁止令の国があり、違反をすると厳しく罰せられ市中を引き回されたという話もありました。この頃では、禁煙と書かれた場所も増えタバコを吸わない人にはいいけれど、父のような人には耐えがたいことなのではないでしょうか。僕の中では、ドラッグと言うと恐ろしいもの、絶対にやってはいけないものと思っていますが、身近に感じるものは、これぐらいなら大丈夫かなという思いもあります。今の僕たちの回りには全く無縁のものであってほしい言葉ですが、日本の都会では数多くの種類の多量のドラッグがその魔の手を広げ、僕たちと同じくらいの多くの中高生が捕らえられている事実が山のようにあるのです。ドラッグは例え少量であっても充実感や快感をもたらし、必ずいい気持ちになり、再度乱用したいという強い欲望を生じさせるのです。でも、それが友達や家族を悲しませ苦しめることがわかっていきますか。

母が読んでいた本の中にある少女の話があつて、僕は幸せだと感じたことがあります。その少女の家は、両親も立派でちゃんとした家庭だったのですが、少女は父親と仲が悪くいつもけんかばかりしていました。そして、悪い仲間に入り、
「二度ぐらいなら大丈夫。」
「ストレス解消させてくれる。」
「いやなことが忘れられる。」
と言われ、悪いこととはわかつていたのに一度だけならドラッグに手を出し、その一回だけのことが原因で、二度と家族の元に帰ることができなくなり、幻覚症状、被害妄想で精神異常になり最後は自殺をしてしまった話でした。

一度の乱用が死をまねくヘロイン、脳を溶かしていく有機溶剤、精神を破壊する睡眠薬系ドラッグ、死ぬまで止められないコカインなど、乱用を止めようとしても体がドラッグを要求してきます。少女だって自分の最後がこんな死に方になるとは思っていなかっただろうし、たった一回だけと思つてすぐ止めることができると思つてやったことなのに、父親と仲が良かったらと後悔しなかったのでしょうか。都会ではドラッグが知らない所で広がり、僕たちと同年代の仲間が、
「みんなやってるから。」とか、
「ドラッグをやることはカッコいい。」とか、
「ドラッグを使うとやせる」とができる。
の理由だけで乱用している数が増えているそうです。そんな安易な考えだけで万引きをしたり、恐喝をしたり、友人を裏切ったり、家族を悲しませたり、今の僕には考えられないことが起きています。その一方で、ドラッグと言つても末期ガン患者の激痛に対して、その苦しみを和らげるためのモルヒネがあります。僕の身近な人で元気で良く笑つて話しかけてくれた人が、ガンの痛みに耐えるためモルヒネを使いました。でも、そのために笑顔がなくなり、言葉も少なくなり、僕の知っている人ではないようでさみしい思いをしたことがあります。でも、モルヒネを使うことで、痛みが和らいでいたのなら仕